

語りかける主体とわれわれ

土肥秀行

「文学はなにも変えはしない」

レナート・セツラ

連続講座「越境する民—変動する世界」の初回「マイノリティを語る—イタリアとフランスのいま」にてわれわれが意図したのは、マイノリティ、具体的には移民をめぐる現在の状況を、イタリアとフランスの現場から（あるいはそれぞれの言語で）発信される近年の文学にみていくことであった。フランスを対象としたのは、2015年1月のシャルリ・エブド襲撃からパリ同時多発テロ、そしてニースの事件へといった一連の流れと無関係ではない。たしかに事柄が「熱い」うちは、なかなか文学に取り上げられない。それでも東北の震災と福島原発事故の場合は、「震災後文学」（木村朗子）ととらえられうるものがあつたように、文学が敏感に時代感を伝えることがある。ゆえにわれわれはあえて文学にこだわっている。タイトルに「語る」とあるのはそのあらわれである。といつても、われわれの考える文学は、続く論考で明らかのように、「移民文学」では座りが悪く、決して何かを「伝える」といった一方通行の堅さの認められる記述でもない。寄稿者のひとり、精力的な翻訳活動で知られる栗原俊秀氏は、このところ南イタリアに点在するアルバニア系のマイノリティ「アルバレシュ」出身の伊語作家カルミネ・アバーテの作品を訳してきた。アルバニアからイタリアへの500年前のディアスポラと、1990年代の大量移民流出が背景にあるものの、アバーテの物語は、そうした大文字の歴史から外れた、目の前の暮らしや感情という個別な「小ささ」をみすえている。

もちろん「語る」主体は人間個々の意志に委ねられているが、いずれもが「表現の自由」という最もヨーロッパ的な価値観に支えられている。シャルリ・エブド事件の際には多くの人が抗議のために広場に降り、たとえ悪趣味な政治風刺であっても「表現の自由」擁護を訴えていた。あの悲痛な追悼のデモ行進では、健全な市民感覚への回帰が意識されており、各国の首脳も多分にジェスチャーではあるが人々に追隨したのだった。この事態にいちやく応答する岡真理氏企画のシンポジウム「現代世界—欧州・中東—を《文学》から考える」にて、仏語作家たちをとりあげたのが石川清子氏であった。フランス帝国主義がひきおこした移動を経験した個人が、自らの意志とは別に抑圧者の言語＝仏語を手段としてどう書くか、文学の根源にも至る問いが生じている。

フランスで起こった出来事の「生」の映像に、文字通り震撼したわれわれに、翌2016年に新たな視覚的刺激が加えられることになる。その年2月のベルリン国際映画祭で、エリトリア育ちのイタリア人映像作家ジャンフランコ・ロージによるドキュメンタリー映画『海は燃えている～イタリア最南端の小さな島～』（*Fuocoammare*）がグランプリを獲得した。しかし衝撃とは

違う、醒めた現実への目覚めともいえる感覚をわれわれは味わったのだった。映画は、日々、北アフリカからヨーロッパ入りを試みる移民船が辿り着く、あるいは付近で遭難してしまうランペドゥーサ島を舞台とし、いたって平安な漁師一家の日常と、沖合の悲劇がなすコントラストを描く。われわれの暮らしの間近で起こっているにも関わらず見えずにいる現実を提示し、しかもあくまでも日常の延長線上にあるとする。ゆえに「醒めた」目線が保たれている。この映画が人々にどう受け取られたかは、ベルリン映画祭コンペティションの審査委員長を務めた女優メル・ストリープによる、授賞式でのコメントに端的に言い表されている。「映画の興奮とオリジナリティによって、審査委員は共感に包まれた。芸術と政治、それに様々なニュアンスがこめられた映画、まさしくベルリンが意図する芸術を体現する映画である。自由な語りと真実の映像によって、今日起こっていることをわれわれに語りかける。緊急かつ幻想的、いま必要な映画なのだ。」もはやヨーロッパのフロンティアとしての象徴性を帯びてしまったランペドゥーサを、ここ数年追いかけている山根美奈氏は、今回、移民を対象とした文学コンクールについて報告する。

われわれがこの映画のような現実を「語りかける」行為に敏感となるきっかけは、直接的には、講座のちょうど一年前に行われた「プレ」イベントにある。同会場にて2015年10月9日に、伊語ラッパーのアミル・イッサーによるレクチャーとミニライブが開かれた（現代イタリア文学研究会主催）。アミルは、エジプト出身の父親とローマ郊外の村落部出身の母親をもち、かつては国内移動民が住みつき、いまや移民街と化したローマのトルピニャッターラ地区をホームタウンとする。彼がわれわれに伝えたのは、とりわけスターになってから人々の差別感情にさらされる日常ではなく、イタリア特有の素朴であけすけな差別に対し怒り呆れつつも、辛抱強く「対話する」姿勢であった。差別に対して対抗するのではなく、ラップで語りかける姿勢である。そもそも自分は、差別されているとも、疎外されているとも感じない、ただ「不利な立場にいる」だけで、ゆえに人一倍努力してきた、と語っていた。そのように自己規定する事情には、差別に対抗する力が生んでしまう別の差別への懸念、また自分が「差別されている」とみなすなどおこがましいといった遠慮もあるだろう。ゆえにルサンチマンを表現の糧としない「前向きな」姿勢が、近年の発表曲には顕著である。そのようなアミルは、現代のアウトサイダー音楽であるラップを表現手段とし、徹底してマイノリティに寄り添う姿勢を崩さない。例えばイタリア国籍法が原則とする血統主義の修正キャンペーンを進めてもいる。

ただ出発点における彼の語りは直截であり、むしろ怒りや憤りといった感情のほとばしりそのものであった。それというのも「初めて読んだ本」がギャングスタラップの創始者の一人アイスTの自伝であったからかもしれない。原著の翌年に出たイタリア語版*L'opinione di Ice-T*（「アイスTの申し分」、邦題『オレの色は死だ—アイスTの語るLAジャングルの掟』）がラップのみならず本との出会いとなった。そこから語りかける言葉を身に付け、ラップを実践していった彼の初期の代表曲に耳を傾けてみたい。

アミル・イッサー「オレは移民じゃない」(Non sono un immigrato, 2007)

ひとはオレを移民と呼ぶ、外人の顔したオレをひとは移民と呼ぶ、この苗字のせいでオレは自分の国で余所者だ

ひとはオレを移民と呼ぶ、外人の顔したオレをひとは移民と呼ぶ、オレは自分の国で余所者だ、オレら第二世代こそこの国の未来なのに

あえて社会に入れてもらう必要なんてない、オレはこの地で生まれた、親父とは違う、移民じゃない、テロリストじゃない、亡命者じゃない、パスタとピッツァを食べるオレはれっきとしたイタリア人だ、おまえの名前がマリオならオレの名前はアミルだ、砂漠出身じゃない、ターバン巻いてラクダになんか乗ってない、露天商じゃない、カーペット売りじゃない、不法滞在者じゃない、路上の窓拭きじゃない、不浄の血の流れるオレを不信心者と呼ぶがいい、受け入れてもらう必要なんてない、オレこそすでに未来だ、服のセンスも悪くない、ダサくもない、指名手配犯じゃない、ビン・ラーディンじゃない、オレが育ったのはここ、おまえらの家の軒先だ、選挙権もあれば兵隊にだってなれる、苗字からは信じられないかもしれないが、身分証明書を出世というなら堂々と見せてやるさ、れっきとしたイタリア人の証明を。

（後略、石田聖子訳）

アミルの憤りは、森千香子が『排除と抵抗の郊外—フランス〈移民〉集合地域の形成と変容』の冒頭で紹介していた、「フランス国民」である移民の子は「移民2世」とはしない原則が、移民流入の歴史が浅いイタリアには欠けているため、ともいえる。もちろんそうした建前に潜む欺瞞こそが問題となるのであるが、今回の講座では、石田智恵氏は、フランスでもイタリアでもない、一歩ひいたところから構造的なアイデンティティ問題を照らす役割を担う。文学ではないところから、今回のように地域限定で問題をとらえる際にどうしても抜け落ちてしまう例外—それこそ差別であろうが—についてもふれる。そして、しばしば強制された人々の移動がひきおこす問題は、なにもイタリアやフランスに限ったことではない、その小枠でとらえるのみであってはならないと気付かせるのである。

